

マラソンの佐々木七恵さん、どうして結婚を境に引退してしまつたのですか。世界の多くのライバルたちは、結婚生活と競技生活を両立しているのに、なぜ日本女性にはできないのですか。

### ●スポーツ紙一面を飾る女性選手

スポーツ新聞が変わった、という声をよく聞く。以前はプロ野球が独占していた一面にプロ野球以外の話題を占めてくるケースが増えたのだ。スポーツ紙の一面は、ここにどんなニュースを載せるかで、その日の売り上げが左右されるほどの重みを持っている。それがここ数年の間に大きく様変わりして、スターの結婚や離婚といった芸能ネタや、山口組対一和会のような社会ネタも見かけるようになった。

読者の関心の多様化を反映している

この現象で最も目立つのは、アマチュア・スポーツの登場回数が増えたことだ。スポーツ・ウーマンが一面を独占するのも珍しくなくなった。米国で活躍するプロゴルフの岡本綾子、それに結婚と進学で話題をまいた二人のマラソン選手、佐々木七重(エスピー食品)と増田明美(法政大)は抜群の人気を持つている。彼女たちのネームバリューは原や江川といったプロ野球のスターに勝るとも劣らない。その証拠に、『巨人軍の機関紙』といわれる某スポーツ紙でも彼女たちの話題で一面を占めることもあるのだから。

考えてみれば、女性がこれだけスポーツに取り組むようになったのだからスポーツ新聞の一面に女性選手が取り上げられても不思議はない。女性だけのスポーツ・イベントの増加を考えると、まだ少なくない。スポーツ紙も含め、女性選手がマスコミに登場する回数は今後増えていくはずだ。水泳の長崎宏子(秋田北高)、柔道の山口香(筑波大)、スピードスケートの橋本聖子(富士急)らは『一面候補生』だし、そのほかにも世界的な実力を持つ選手が育ってきている。

### ●上り坂なのになぜ結婚で引退？

盛んになる一方の女性スポーツだが乗り越えなければならぬハードルもある。ここでひとつ、根源的な疑問を提出したい。

最近、各スポーツ紙の一面を絵ナメにしたのがマラソンの佐々木七恵である。現役生活最後のレースに見事優勝し、結婚のための引退に花を添えたというストーリーが日本人には受けられよう。別に佐々木選手の結婚にケチをつけるつもりはないし、『結婚だけが女性にとつての幸福か?』と問題提起する気もない。ただ、どうして結婚

したら競技生活をやめなければいけないのか、といたいだけだ。

低年齢化する水泳や体操と違い、陸上長距離種目の競技者としてのピークはかなり遅い。つまり佐々木選手はその気になれば、ソウル五輪だって狙えるのである。競技者としてはまだ上り坂にある女性がなぜスポーツを投げ出さなければいけないだろう。日本の女性選手がかかえるこの問題(ご当入たちは問題と思っないかもしれない)に目を向けられない限り、スポーツ紙の一面を女性がいくら独占しても喜ばない。

日本でおなじみのジョイス・スミス(英国)やカプリエル・アンデルセン(スイス)、ゴーマン美智子らは全て既婚者だ。今年の大阪女子マラソンで優勝したキャリア・メイ(アイルランド)は結婚するが、マラソンはやめない。女子マラソンの前世界最高記録保持者グレート・ワイツ(ノルウェー)も家庭生活と競技を両立していた。

これらの選手をみて、『日本とは文化や習慣が違うから』といってしまうのは簡単だ。だが、彼女たちにできてどうして日本女性にできないのか。

### ●W S F・Jに期待するもの

ほかのスポーツを例にとろう。バレーボールでは、全日本の選手が、いわゆる適齢期を捨てて、オリンピックを目指すことがある。東京大会の『東洋の魔女』がそうだったし、ロス五輪で活躍した江上由美(日立)も一度引退しかけたのを引き止められている。発想を変えて、先に選手たちを結婚させ精神的にも安定したところでオリンピックを狙わせるのはどうだろう。その方が練習の効果があると思うのだが。

同じマラソン選手でも、男性の瀬古が『これで安心してソウルを目指せる』というのに、女性の佐々木は競技をやめて家庭に入る。日本で女性が人生を通じてスポーツを続けていくには、環境が整っていないということか。女性を取り巻く差別、社会的な圧力、あるいは家庭を含めた労働条件の悪さなど改善していかなければならないところが多い。スポーツ紙が女性を扱う場合はそんな問題に目をつぶり、話題性だけで書くケースが普通だ。女性競技者がノビノビと自由にスポーツを楽しむ環境をつくるのに、マスコミはアテにできない。頼りになるのはW S F Jヤパンだけだと思ふ。